



YAMAGA

近代の山鹿を
築いた人たち
シリーズ

002

明治維新の偉大な学僧（二八〇八〜二八九三）

原口針水

はら

ぐち

しん

すい

針水は、博多萬行寺の曇竜に師事し深く浄土真宗について学びました。また、幕末の頃から国学が盛んになり、やがて神道が力を持つことを予見して、その研究もしていました。

後に生家光照寺の学寮「累世覺」で後進の指導にあたりましたが、五十代半ばで上洛し、浄土真宗の本山「西本願寺」に出仕しました。

明治二十四年には大学林の総理（現龍谷大学学長）に就任し、さらに数多くの指導者の育成に尽力しました。当時の代表的学僧「島地黙雷」もかつて「累世覺」に学び、針水を生涯の師と仰ぎました。



梅檀は双葉より芳し

(天才といわれた少年時代)

山鹿市菊鹿町は、八方ヶ岳の麓に広がるのどかな田園地帯です。ここを流れる上内田川は、川床が大小様々な岩石できていてとても美しい川です。上流には、矢谷渓谷があつて、夏の観光地、キャンプ場として県内外から多くの観光客が集まってきました。また、中心部にはあんずの丘があり、公園や多目的スポーツ施設、陶芸工房やパン工房、押し花体験館などの施設があり、休日には親子連れでにぎわっています。近年、古代の山城である鞠智城の発掘が進み、鐘楼や兵舎、高床式の倉庫など多くの建物が復元されました。山鹿市では、貴重な文化遺産として国営公園にしようとして働きかけています。

そんな美しい水と山に囲まれた下内田村日渡地区に原口針水は生まれました。江戸時代末期の文化五年、西暦一八〇八年のことです。生家は、豊臣秀吉の時代にできた古いお寺で対岳山光照寺といえます。

子どもの頃の名前を妙丸みょうまると言つて、ひ弱で病気がちな子どもでした。母親とは四歳の時に死に別れて、義理のお母さんによって大事に育てられました。

今では考えられないことですが、妙丸は五歳からお坊さんになる学問を始めます。七歳で母親の生まれた安立寺で基本的なお経を習いました。九歳では隣村のお医者さんに弟子入りし、四書五経（中国の孔子の教え）を勉強しています。十二歳から十四歳までは、父親の密道和尚と叔父の顕明和尚に就いてお経の解釈を学びました。

一日中勉強しても飽きることなく、毎日たくさんのお経を暗唱していたそうです。

その後、妙丸は名前をお坊さんらしく得慶と改め、父と叔父のもと累世鬘あゐせいご（光照寺の学寮）で学問を深めていきました。

現在はないのですが、当時の光照寺には、お弟子さんたちが学ぶ学寮がありました。昔から累々とお経の解釈について勉強する学寮だったので、累世鬘と呼ばれていました。累世鬘は五世（五代目のお寺の相続者）明秀が建てた学舎で、以来十二世の針水まで百年以上も優秀な学僧が住職をしています。その頃、累世鬘に勉学する学生は五十人ほどでしたが、歴代では九州各地から三千人もまんぎょうの学生が学んだといわれています。

得慶は、天保元年（一八三〇）二十三歳の春、博多にある万行寺まんぎょうの高名な学僧、七里曇竜しちりどんりゅうに師事し、宗学を学びました。このとき、師の曇竜から針水しんすいという名前をもらいました。

万行寺にいた時代は、曇竜に追いついて京都に数回同行しています。天保八年の上京の際には、大阪で大塩平八郎の乱を目撃したと後に語っています。天保十二年（一八四一）師の曇竜が亡くなると、針水はしかたなく万行寺を去り、故郷の光照寺に帰ってきました。その頃には、すでに曇竜門下で一番の学僧となつていて、全国にその名前が知られる有名な存在となっていました。針水が一番の弟子、島地黙雷しまぢもくらいが後に針水の一周年にあたって書いた文章に、当時の針水の学問の深さを次のように述べています。

『想うに、竜門の義轍ぎてつを学び、鑽究せんきゅうの久しき十年余り。その詣造しぞうする所深遠しんえんにして、玄雄げんゆう、栖城しよせうら諸先学しよせんがくと同じく、竜華瀉瓶りゅうわしゃへいの名譽ありて、宛も河水かすいの源泉混々こんこん、昼夜しゆやを舍おかず、科かに盈みちて四海かいに達するの感ありし』

簡単にいうと、「曇竜門下に入つて、勉学すること十年が経つた。その考えることはとても深く広く、真宗の学問を究めた玄雄

ちょっとコラム

●針水しんすいとは博多万行寺の曇竜師が付けた名前で、西域記の提婆（ダイバダッタ）と竜樹（ナーガールジュナ）の物語に由来している。提婆はある日、お釈迦様しやくかの一番弟子の竜樹に対して仏教の解釈について論議を申し入れた。竜樹は、提婆の悪評を聞いていたので、弟子に命じてあらかじめ鉢にいっぱいの水を準備させておいた。約束通り提婆がやって来た時、黙ってその水を指し示すと、提婆は一本の針を取り出し水の中に投げ入れた。

竜樹が弟子に解釈してこう言った。「提婆は利口だ、私のなみなみいっぱいの水（竜樹知恵の深さ）の問いに対し、針を投げ入れたのは、お前の知恵の底は見極めたという答えを返したのだ。」

その故事から、針と水で針水とし、知恵の深い僧となるようにとの願いが込められている。

・栖城すじょうと肩を並べるくらいだ。竜華派の学問を修める様子は、川の源流の泉の水が、昼でも夜でもこんこんと湧いてきて海に満ちていくようだ。」とほめたたえています。

次のようなエピソードがあります。ある神官がしきりに八百万やちまふの神々ということをしげらかすのに堪りかねた針水が、「それならば、その無数とも言える神々の御尊号でも承りたい」と切り込んだところ、その神官は即答に窮してしまっただけです。「では、はばかりながら愚僧が」と、立て板に水を流すように、二百もの神の名をすらすらと並べ立てて、「愚僧もこの程度のことは何か…」と。そこで相手は啞然となったということです。



針水の生家 光照寺



ちよつとコラム

●博多万行寺の修業時代、針水が三年ぶりに休暇をもらって帰ってきた時のことです。叔父顕明の所へ挨拶に行きますと、叔父は、いきなり針水を怒鳴りつけ次のように言ったそうです。

「馬鹿者めが、時をムダにするな。即刻博多に帰れ。」

この叔父の一言によって、針水は家に上がることもなく、父との対面もできず、すげすげと博多に帰ったと言うことです。学問の道は険しいと言うことですね。

師として累世るいせい費ひで弟子を育てる

それまでは、お弟子さんだったのですが、一八四一年、地元下内田村に帰ってきた針水は、父密道みつどうと叔父の顕明けんめいと一緒に、三人でお弟子さんの指導に当たりました。この頃、九州各地から仏教の学問を学びに多くのお弟子さんが来ていました。その後数年経って針水は父の跡を継いで三十六歳の時、光照寺の住職になりました。針水の学問の深さを聞きつけた、多くのお坊さんが彼のもとを訪れ、そのために、光照寺へ続く細い道が、人通りの絶えない広い道になったと言われています。

京都へ

針水は文久元年（一八六二）五月二日、明治維新の六年前、五十四才のとき、まだ十才になったばかりの我が子である要よう蹊けいに寺の仕事をまかせて京都へ行きます。そして西本願寺及び龍谷大学の前身である学林がくりんにおいて責任ある職に就きました。

慶応三年（一八六七）八月五日、司教しきょうになった針水は、他の先輩学僧数人とともに、仏教の正しい学びを積極的に推進すいしんして、それを広く伝えていく役に就きます。

明治五年（一八七二）に政府が「大教院」という、神道を主体として仏教を統合する機関をつくったとき、針水は本願寺を代表して出仕し、浄土真宗の立場を主張しました。後に「大教院」を離脱し、黙雷とともに政府の宗教政策を厳しく批判し、仏教を擁護しました。

キリスト教を学ぶ

慶応四年（一八六八）一月、西本願寺は当時の日本に押し寄せてくるキリスト教に対して、「破邪はじやく顕正けんせい」（よこしまなものを破り、正しいものをあらわすということ）の任務に当たる職を新設しました。

天皇の勅許ちよくきょを待たずに、幕府が行った開国の影に、キリスト教がどんどん上陸してきました。新しい時代には新しい救い、心の糧かてを求める民衆の欲求があるのは当然です。仏教者にとって、それは脅威きょうゐでなくてはなりません。ここに、止むに止まれぬ自衛じゑいの砦とりでとして、「破邪顕正」の旗をかざして、キリスト教に対抗することが必要不可欠ひつようふかけつとなってきたのです。

針水は、既にこのときの到来を予測していたのでしょうか、文久年間、長崎において、天主教の、C・Mウィリアムズに師事し



原口針水の碑

て、キリスト教を研究し、真宗学界きつてのキリスト教学精通の名を得ていました。

キリスト教論破のためには欠かすことができないといわれた、かの有名な「崎陽茶話」・「長崎邪宗始末」の二つの本は、彼が書いたものであると言われています。

針水は、このような幅広い学識のために、本山が新設した「破邪顕正」の役職を最初に受け、本山や学林の最高幹部の人たちに、手ほどきを命ぜられ、真宗復興運動の課題に第一線で取り組むことになりました。

また、『諸宗同徳会盟』が結成されたのもこの頃です。これは、仏の学びを護り、キリスト教の脅威に立ち向かうために、仏教の各宗派が手を繋いで、学びかつ戦うというものであり、彼はその設立・運営の中軸となり活躍しました。

安居本講での講義

「安居」とは、「安く居る」と書きますが、決して文字通りではありません。

安居は梵語から来ており、雨期のことをいいます。インドでは、雨期の三ヶ月を僧は僧院にこもって、学門に励むことと決められていました。

この風習を受けて、真宗西本願寺では特に、江戸中期以降から厳格に行われるようになりました。

この安居は、宗門最高の権威あるセミナーで、ここで講演する者はいつも超一流の学僧がこれに当り、本講ともなれば、門主に代わって宗学についての講義を行うという名誉あるものなのです。明治二年の安居では、当時学階第二位の司教の任にあった針水が特に選ばれて、「破邪顕正」についての講師として講義をしました。

このことは、彼のキリスト教学がきわめて重要かつ不可欠のものであり、優先的に学習すべきであるとされたことを証明しています。



針水の晩年

針水は、明治六年（一八七三）、六十六才のとき、真宗学階の最高の位である「勸学」職にのぼります。四才時に始まる六十年余の仏教学についての勉強、努力の結晶です。

勸学職とは、得業、助教、司教の順に上階に向かう最高の位で、その人数も時代によって決まっておらず、一〜二人にとどめて、針水はそれを受けたのでした。

真宗西本願寺派学界の中での最高のセミナーを『安居』ということとは前に述べたとおりですが、針水は、助教・司教の学階当時、計五回出講し、また、明治六年に勸学になってからも、安居本講・副講・特命の別講等を併せて六回の講義を行っています。これはまさに異例のことです。

この中の最後の記念すべき安居出講が、明治二十四年のものでした。ここでの本講は、針水が「観念法門」を講義し、副講を針水の弟子である島地黙雷が「文類衆紗」を講義したのです。

このように、師弟そろっての講義は、前例をみないもので、大きなよるこびであり、光栄であったと、黙雷は言っています。その後も針水の活躍は続きます。

- 明治一四年 顧問（勸学職の中から）
- 一六年 次の門主大谷光瑞師の学事長
- 二一年 終身、内陣上座一等着席
- 侍講（法主のため）
- 本山臨時執行代理
- 二三年 再び大谷光瑞師の学事長
- 二四年 大学林総理（現竜谷大学々長に当たる）
宿老議員



光照寺書庫の蔵書

こうしてついに、西本願寺における『元老』という最高の地位になったのでした。

明治二十六年（一八九三）五月、京都の真実寺で入浴の際、あやまってかすり傷を負い、それがもとで京都病院に入院、万全の手を尽くされましたが、何分の老体、快復には至りませんでした。その間、親しく見舞われた法主から、本願寺における長年の功勞をねぎらわれ、特に、見敬院の院号をたまわり、中品（ちゆうぼん）の尊号を与えられました。針水は感涙にむせぶばかりでありました。

そして、ついに六月十二日に大往生をとげました。

葬儀は、針水が死の十か月前まで総理をつとめた大学林に特設された葬儀場で、門主明如上人・嗣門主鏡如上人（大谷光瑞師）を始め、本山・大学林を挙げて、かつ、全国から門弟や有縁の人々千数百余の参列のもと、厳粛で盛大に行われました。

竜谷大学元学長前田慧雲は、その著『真宗学苑談叢後篇』に、原口針水に対する讃辞の中に、「針水和尚は経論を講ずる時に原稿や資料を一緒に用意されることはなかった」と言っております。原稿なしの講義ということは、仏教学のたてまえから、きわめて難しいことです。生涯に渡って書きあらわした四十冊もの著書は、ほとんどみな講義のために用意したものと思われませんが、実際の講義のときは、それを見ることはなかったというわけです。針水は、もの凄い勉強を積み重ねた上に、非凡な記憶力を兼ね備えた、すばらしいお坊さんだったのです。

【写真及び取材】

山鹿市菊鹿町下内田 光照寺

原口針水の短歌



原文のまま

八十餘り四とせかさねて五たひも

学のをまもる嬉しさ

針水

書き換え

やそ 八十餘り四年重ねて五度も

まなび その 学の園を護る嬉しさ

針水

山鹿市立博物館所有『鬼木家灯籠屋台の短冊』より

年表 History

(一八〇八年)	山鹿郡下内田村日渡に出生する
(文化五年)	
(一八一一年)	生母他界する。
(文化八年)	
(一八一三)	
(一四年)	安立寺にて大経・観経を学ぶ
(文化十三年)	
(一七一年)	永野大受に四書・五経を学ぶ
(一八一五)	
(文化十三年)	
(一八三〇年)	博多万行寺七里曇竜師に師事する
(天保一年)	
(一八四一年)	曇竜師入寂、自坊に帰山
(天保二年)	
(一八四三年)	光照寺住職
(天保一四年)	
(一八四八年)	阿蘇にて神代巻を講ず、得業
(嘉永一年)	
(一八五〇年)	継母他界
(嘉永三年)	
(一八五二年)	叔父 顕明入寂
(嘉永五年)	
(一八五三年)	父 密道入寂
(嘉永六年)	
(一八五五年)	助教、上洛重職に就く
(安政二年)	
(一八五七年)	島地黙雷入門 (二〇才)
(安政四年)	
(一八六一)	
(六三年)	長崎にてキリスト教を学ぶ
(文久一三年)	
(一八六一年)	家督を一子要蹊 (二〇才) に譲る
(文久一年)	
(一八六七年)	司教・御前講「選択集」
(慶応三年)	
(一八六九)	
(七一年)	
(明治一)	本山における法談試験の能問者 (試験官) となる
(一八七二)	
(一八七二年)	勸学
(明治五年)	

(一八七二年)	大教院教導職能問者 (中講義・大講義)
(明治五年)	
(一八七九年)	門主の東上に随従
(明治二年)	
(一八八〇年)	本山講究員に
(明治三年)	
(一八八二年)	四恩弁 (針水原著・黙雷衍義) を刊行
(明治五年)	
(一八八二年)	門主の東京・信州行に随従
(明治一五年)	
(一八八三年)	嗣門主 (大谷光端師) の学事長に、終身内陣一等着席
(明治一六年)	
(一八八二年)	考究局長代理
(明治二年)	
(一八八八年)	酬労年金一等
(明治二年)	
(一八八八年)	内局出仕、臨時執行代理 (西本願寺最高任者)
(明治二年)	
(一八八八年)	顧問兼侍真
(明治二年)	
(一八九〇年)	嗣法主学事長 (再)
(明治三年)	
(一八九一年)	兼侍真長
(明治四年)	
(一八九一年)	大学林 (龍谷大学前身) 総理代理
(明治四年)	
(一八九一年)	一等巡教使
(明治四年)	
(一八九一年)	宿老議員
(明治四年)	
(一八九三年)	入寂 (八十六歳)
(明治二六)	
(一八九三年)	葬儀 (大学林構内特設葬場)
(明治二六)	
(一八九一年)	西本願寺から特別賞与第一種第一等追贈
(明治四四年)	
(一九二二年)	立教開宗七百年記念慶讃法要に際し表彰 (大谷尊由門主)
(大正二二年)	

参考文献
『原口針水 評伝・資料修成』 森川恒臣著
『郷土の人物誌』 熊本日日新聞社編

あとがき 山鹿市教育長 田中 宏

山鹿市では「人づくり」を大きな理念・目標として行政に取り組んでいます。そのような中、教育委員会では「近代の山鹿を築いた人たち」と題して、ふるさと山鹿の今日を築いた偉人を、子どもからお年寄りまで広く市民の方々に紹介し、顕彰できる冊子を発行しようと考えました。特に未来を担う子どもたちに、ふるさと山鹿にはこんなに立派な先輩がいたと言うことを知ってもらい、郷土を誇りに思い、将来に夢と希望を持ってもらいたい。このような願いを込めて発行したものです。なお、編集に当たっては、各学校の先生方に献身的にご協力をいただき心から感謝致します。

近代の山鹿を築いた人たち 002
明治維新の偉大な学僧 原口 針水

平成 20 年 3 月 発行
山鹿市教育委員会 教育部 文化課
〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085 (博物館内)
TEL 0968-43-1691

編集委員
委員長 / 中山 哲朗 (鹿本中) 班 長 / 大塚 義彦 (菊鹿中)
委員 / 桑机 昌文 (内田小) 吉里 正雄 (六郷小)
松永 悦子 (城北小) 最上 敏 (八幡小)